

落谷虹児

美しき詩画集の世界展



月夜の幻想 (画集『私の画集』1925年)



2026 2/3(火)-4/19(日)

開館時間／午前9時～午後5時(入館券の販売は午後4時30分までとなります。)

休館日／月曜日(但し、祝日の場合は開館し、翌火曜日を振替休館といたします。)

入館料／一般・大学生550円(有料入館者20名様以上は団体料金440円)、高校生230円、小・中学生120円

※障がい者手帳・養育手帳をお持ちの方は無料(受付で手帳をご提示ください。)

主催／新発田市、新発田市教育委員会、落谷虹児記念館

わたくし まぼろし

わたくし

まぼろし

私の精は絵。私の絵の精は、詩。

いのち

ニンフ

この二ツのまぼろしは 生命のわたくしの、美の精。

(詩画集『二ツの幻影』序文より)



「睡蓮の夢」

(詩画集『睡蓮の夢』1924年)



『名残の絵姿』挿絵

(1925年頃)



「可愛ゆい時計」

(詩画集『悲しき微笑』1924年)



「花嫁人形」

(詩画集『花嫁人形』1935年)



「舞妓寒むかろ」

(詩画集『二ツの幻影』1923年)



「なやみ」

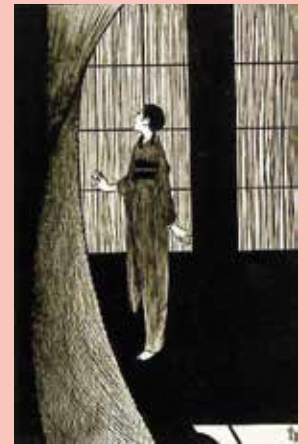
(詩画集『睡蓮の夢』1924年)

子供の頃から読書好きであった虹児は、父親の書棚にある書籍を読み耽る少年でしたが、なかでも特に好きだったのは、島崎藤村の詩集でした。

口語自由詩が確立した大正期、詩壇の動きも活発になり、童話・童謡雑誌『赤い鳥』が鈴木三重吉によって創刊されます。これを契機に、童謡界にも新しい潮流がもたらされ、北原白秋、野口雨情、西條八十ら詩人の活躍によって隆盛期を迎えました。こうした時代を背景として、虹児も少女雑誌を中心に詩を発表するようになります。

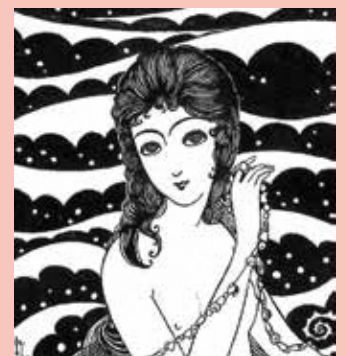
1922(大正11)年、野口雨情の推薦で、初めての詩画集『銀の吹雪』を刊行し、その後、1925年にパリへ旅立つまでに9冊の詩画集を立て続けに発表しました。「花嫁人形」の詩はこの頃に書かれ、パリから帰国したのちに詩画集『花嫁人形』として刊行、虹児の代表作となりました。少女たちに向けられた甘く切ない抒情詩は、少女時代を虹児の作品に親しんだ世代には懐かしさを、現代の若い世代には新鮮に映ることでしょう。

そして、詩に添えられた挿絵には、詩の世界を膨らませる珠玉の作品が数多くあります。100年あまりたった今でも、情感豊かな詩とそれらに添えられた精緻な挿絵は、今もなお色褪せず、多くの人々の琴線に触れることでしょう。虹児の美しい詩画集の世界をご堪能いただければ幸いです。



「月光波」

(詩画集『睡蓮の夢』1924年)



「貝の首飾り」

(詩画集『銀砂の汀』1924年)

KOJI FUKIYA MEMORIAL MUSEUM OF ART

落谷虹児記念館

〒957-0053 新潟県新発田市中央町4丁目11-7 電話&FAX 0254-23-1013



記念館全景